



Title	NMR Study of Magnetism and Superconductivity in Heavy-Fermion Systems under Pressure
Author(s)	川崎, 祐
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3169506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	川 崎 祐
博士の専攻分野の名称	博 士 (理 学)
学 位 記 番 号	第 1 5 5 4 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成12年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 基礎工学研究科物理系専攻
学 位 論 文 名	NMR Study of Magnetism and Superconductivity in Heavy-Fermion Systems under Pressure (重い電子系化合物における磁性と超伝導の圧力効果の NMR による研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 北岡 良雄 (副査) 教 授 天谷 喜一 教 授 三宅 和正

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では磁気臨界領域にある様々な重い電子系化合物においてその磁性と超伝導を核磁気共鳴 (NMR/NQR) により調べた。

重い電子系超伝導体 CeCu_2Si_2 では磁気臨界 A 相 (低エネルギーのゆらぎを持つ動的磁気秩序) と超伝導が拮抗している。また大きな試料依存性を持ち、ごく僅かな組成比の変化によりその基底状態は静的磁気秩序から異方的超伝導まで変化する。この研究では低温で磁氣的 A 相が支配的な試料に着目し、加圧により A 相から異方的超伝導への遷移領域における磁性と超伝導を Cu-NQR により調べた。

加圧により低エネルギーの磁気ゆらぎの抑制と共に連続的に A 相の割合が減少し、バルクの超伝導に変化した。この基底状態の変化は磁気臨界領域で起こり、A 相が抑制される過程において $T_c \sim 0.65\text{K}$ は変化しない。これらの結果は A 相から超伝導への転移が一次転移的に起こることを示唆する。また A 相の発達にヒステリシスが観測されないことから、A 相と超伝導相のエネルギーは非常に近くほとんど縮退していると考えられる。常圧付近で支配的な A 相の低エネルギーゆらぎは静的磁気秩序と超伝導の中間状態であるという可能性が指摘された。

非磁性の典型的な重い電子系化合物 CeRu_2Si_2 は低温、 $H_M \sim 7.7\text{T}$ の外部磁場でメタ磁性的異常を示す。この研究では Ru-NMR/NQR シグナルの観測により、初めてゼロ磁場及び H_M 以上での測定を系統的に行った。その結果、 $H > H_M$ で観測された重い電子状態は $H < H_M$ で現れるものとは異なる過程を経て実現していることが示唆され、外部磁場による重い電子状態のクロスオーバーが明らかになった。

反強磁性秩序を示す CePd_2Si_2 ($T_N \sim 10\text{K}$)、 CeRh_2Si_2 ($T_N \sim 36\text{K}$) は磁気臨界領域近傍にあり、わずかの加圧で磁気秩序が消失し超伝導が出現する。常圧下での Si-NMR の結果により CeRh_2Si_2 の特異な基底状態が明らかになった。

過去の中性子散乱の結果と NMR スペクトルを併せて考えることにより、 CeRh_2Si_2 の反強磁性状態では異なる Q vector を持つ 2 種類のドメインが共存していることが分かった。NMR により得られた各ドメインでの飽和磁気モーメントは $0.36\mu\text{B}$ 、 $0.22\mu\text{B}$ で、中性子散乱による $1.86\mu\text{B}$ 、 $1.69\mu\text{B}$ に比べて一桁も小さい。これは磁気モーメントが NMR と中性子の特性エネルギーの中間程度のエネルギーのゆらぎを持つことを示唆する。これと類似した現象は U 系の重い電子系超伝導体 UPt_3 や URu_2Si_2 の秩序状態で観測されていたが、Ce 系では初めて見いだされた。

論文審査の結果の要旨

重い電子系超伝導体 CeCu_2Si_2 では磁気臨界 A 相（低エネルギーのゆらぎを持つ動的磁気秩序）と超伝導が拮抗している。また大きな試料依存性を持ち、ごく僅かな組成比の変化によりその基底状態は静的磁気秩序から異方的超伝導まで変化する。この研究では低温で磁氣的 A 相が支配的な試料に着目し、加圧により A 相から異方的超伝導への遷移領域における磁性と超伝導を Cu-NQR により調べた。加圧により低エネルギーの磁気ゆらぎの抑制と共に連続的に A 相の割合が減少し、バルクの超伝導に変化した。この基底状態の変化は磁気臨界領域で起こり、A 相が抑制される過程において $T_c \sim 0.65\text{K}$ は変化しない。これらの結果は A 相から超伝導への転移が一次転移的に起こることを示唆する。また A 相の発達にヒステリシスが観測されないことから、A 相と超伝導相のエネルギーは非常に近くほとんど縮退していると考えられる。常圧付近で支配的な A 相の低エネルギーゆらぎは静的磁気秩序と超伝導の中間状態であるという可能性が指摘された。

本研究によって反強磁性と超伝導が近接している系での新しい量子状態が明らかとなり、新超伝導発現機構の解明につながることを示された。

以上の結果は、磁性と超伝導の相互関係についての全く新しい可能性を実験的に示した研究であり、博士（理学）の学位論文として十分に価値があると認めることができる。